

so lovely a seat

2004

Plaster

1400H × 1500W × 3000D(mm)



作品のテーマ

この作品写真は自動車に乗る二人である。作品タイトルが“so lovely seat”。運転席の女は正面を見据え目的地に向かい運転し、後部座席の男は両腕広げ目を瞑り何か空想を描いている。私が日常で垣間見た風景から浮かんだ発想を基に制作している。自動車という閉じ込められた空間の中には目的地に向かおうとする気持ちが乗る者に働いていてお互いの気持ちと一緒になるものだ。電車、飛行機など移動手段は何でも構わないが共に何かを体験し目的地に向かう。そんな身近な中にある人間関係を主題に置きそれを観る側がどう捉えるかという視点でモノを造っている。また、そのテーマを具現化するにあたり自動車を選択した理由の一つとして親密感や社会性、モニュメンタルな部分を取り込めることだ。

後部座席、男の両隣に空けた左右二つのシートの意味と確保してない助手席は観る側の立場でものを考え制作したものだ。私の制作意図はこのように物質として造らない空間に見る側の意識を持たせることを狙いとした。貴方がそこにいる意味、そして現在、個人、また一緒に生活している者、また社会全体とどこへ向かい何を達成していこうとしているのかという気持ちを込めて制作したつもりだ。だから、自動車の全体を私は造らないし、狭い空間に観る側を引き込もうとすることはしない。現在というもっと大きな空間と広がりを持たせる為に扉や屋根はいらないし、観る側全員がこの車に乗ってこの空間を共有しようとするものだ。

そのように「社会と人間の関わり」をテーマとして人間を表現しているが、完成したという気持ちが出てない。展開としてはこの作品が変化していく可能性を持っている。思案中なのだ。生き続ける作品である。置かれる場所などによって作品の見え方を変化させたい。闇の中を手探りで進んでいるような前の見えないことだが、時々射してくる一筋の光のためにこの作品をおもしろいものに努力することは惜しんではない。

菊地 良逸像

1999

Bronze

鎌田記念ホール 宮城県鹿島台町設置



故) 菊池良逸氏

明治33年（1900年）1月16日船越字本屋敷に生まれる。昭和22年4月5日、地方自治法の施行に伴う村長選挙で、47歳にして無競争当選、第6代村長に就任する。以後7期28年間、町政の責任者として、次々展開される社会の変貌の中で沈着冷静に町の進路を見極めて舵取りにあたり、新しい町づくりの基礎を固めた。就任直後の昭和22・23・25年には大水害に見舞われ、寝食を忘れてその対応に奮闘した。特に23年のアイオン台風では、明治43年の水害を上回る被害となり、極めて激甚であったことから、昭和天皇ご名代として三笠宮殿下が御差遣された。その際に、松島町物見山で関係町民を代表して、品井沼水害状況を言上申し上げる。以来氏は鎌田村長の遺志を受け継ぎ、治山治水をを精力的に推し進め、昭和33年から鶴田川改修促進運動を主唱し、又江合・鳴瀬・吉田川直轄改修促進期成同盟会の会長を務める傍ら、河川改修工事を重ね、退任するまで品井沼干拓事業の仕上げを遂行した功績は大であった。

教育・保健・農政改革等の実績も高く評価され、自治・治水功労者として度々表彰を受け、昭和39年には紺綬褒章。同45年には勲5等双光旭日章を受ける。同50年鹿島台町名誉町民に推戴される。同61年7月6日85歳で没する。その死を悼み町葬が執り行われる。死後従5位勲4等旭日小綬を授けられた。

黄いろの帽子

1998

Bronze

430W × 300D × 550H (mm)



夏を想像させる帽子を被った女性像である。いつもそうなのだがタイトルは最後に決めることにしている。だがこの作品は粘土で造っている最中から”黄色の帽子”って唱えて作業していた。粘土造形で形を探している際には帽子は造っておらず人物像だけに専念していた。上品な顔立ちに造るのはとても難しい。丁寧な仕事を心掛けるだけでは駄目なようで、乱暴に扱ったり小割で突付いたり形を大らかに見たりと忙しく手が動いた。最後は石膏に置き換えて直付けて仕上げた。シャツの襟首とスカーフも最後に思い付きで加えた。なかなか気に入った作品に仕上がった。

空をつれて歩く

1998

Bronze

480W × 200D × 530H (mm)

森實氏蔵



遠くを見つめれば遠すぎて希望が沸いたり諦めたり、近くを見つめれば楽しくて盛り上がったり飽きてしまったり本当に人間の感情は揺れ動く。感情を司っている前頭前野は意志、意欲、人間らしい抑制など、いかに生きるかという判断を行うことにより、行動を制御している面白い器官である。普段何気なく行動している我々も前頭葉が働き行動が伴っているのである。

こんな身近にある我々体内の事でさえ気づかずに生活をしているのに、遠くが気になったりもする。そんな感情をこの作品のタイトルにした。どこまでも歩いていったとしても空は私にいつも連れ添ってくるのである。太陽や月もそうであるように。

LOVE BIRD

2004

Bronze

680W × 420D × 720H (mm)

日米交流150周年記念「二科選抜作家ニューヨーク・ハワイ巡回展」
(イセファウンデーションギャラリー/NY・プレイズデールセンター
/HAWAII)



胸像彫刻の上に乗った小桜インコ(英名LOVEBIRD)を彫刻にしようと作品に取り組んだ。
生後2週間の雛を飼い慣らし手乗りにした鳥をモチーフにした。この鳥はアフリカ原産の鳥で通常色は緑で顔が赤い色をしていて愛くるしい。
鳥の室内を飛び回る行動の中で、偶然に彫刻のブロンズ色と鳥の派手な色彩の妙なバランスが面白く、動かない不自由なものをあざ笑うかのような態度で、気の向くままに自由に飛び回る姿に引かれた。 今後、自分の彫刻を不動のものにしようと模索を始める切欠になった。

man reflection 鏡のなかのあなた

2003/2004

plaster

88 男650W×420D×1830H (mm)

89 女550W×350D×1730H (mm)

第88回 二科展

第89回 二科展 会友賞



虚像の表現を試みた。自分探しや、問掛けをしながら生活する、そして本当の事や嘘、全て認めて前進し後退し楽しみ悲しみ。家族や友人に囲まれ一緒に喜び。自分を写し出す鏡をモチーフにして自分であるような虚像の表現を始めた。形のわずかな動静のなかに内面の表現が出来るように注意し塑造を楽しむ。曖昧に仕事は進めながら、いらぬモノは排除し必要な要素だけを残す。

Disappearing sound

消え去る音

1996

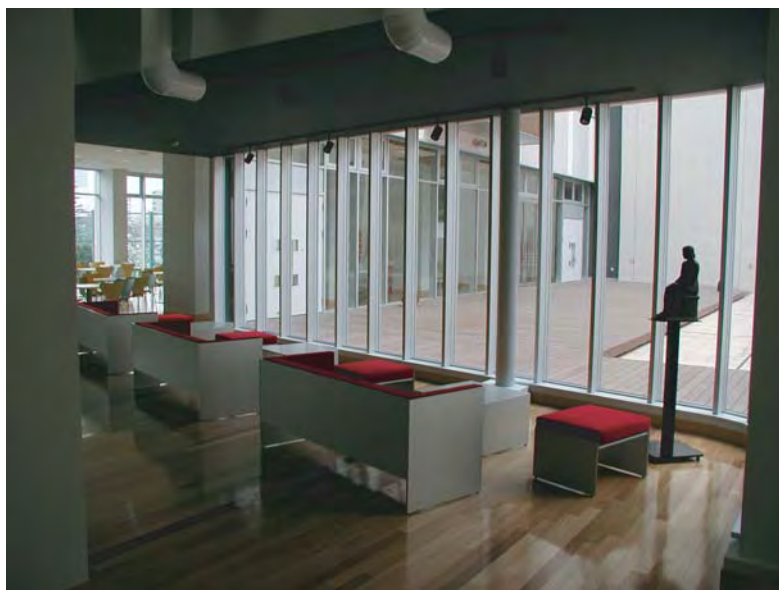
Bronze

170W×330D×540H (mm)

実践女子学園蔵 下田歌子生誕150年記念

桃天館設置

(東京都渋谷区)



音をすまして聞く。音に酔いしれる。意識はその器官へと向かう。その他の器官は停止しているかのようだ。消え去る音は二度と聞くことの出来ない音。空間に消え去る音、もどって来ない音たちの表現である。フルート奏者である、ERIC DOLPHYの演奏後の台詞のなかで、この演奏はもう二度とひくことはできない。演奏とはそういうものなのだ。常に今を感じ今を演奏する。体形や表情は天平仏を意識して制作した。万人の万事を聞いてくださる仏の表情、目・鼻・口の器官を閉じ、耳に神経があるように感じるのは私だけではないはずだ。

"aqua embrace" -水が抱擁する-

2002

石膏

450W×500D×2700H (mm)

第87回 二科展



人間に限らず、地球上の物体は地軸に向かい重力に作用されているが、水の中に入り込んだ生物は重力を失い解放される。人間の態勢を逆さまにすることで水中を表現し、下方にある箱を掴み捕える気持のもどかしさも水中独特の表現で心の風刺だと考えた。制作上で塑造のアングルから離れ石膏に置き換え、手首で掌を広げ下方に向けて立たせた高さ240cmの緊張感は特別のものがあつた。

Sleep in the book

2004

Bronze

750W × 450D × 200H (mm)



睡眠に誘い込む夢。睡眠は日常を刻み込む大事な時間。日中行動するには良い夢と睡眠が大切な事。陽と陰。光輝くものにはしっかり暗いものがはりついている。そしてお互いが協調しあう。

インスピレーションと日常

1996

Bronze

350W × 280D × 450H (mm)



閃きは突然やってくるものです。それは特別な時に限らず日常的なものです。思い入れがありすぎても叶いません。考えなくてもいけません。待っててもやってこないし自分から出向いても何も得られない事がほとんどです。ただただ無になり黙り自分に向かい合う事がかもしれません。

デリケートなゆめ

1997

Bronze

300W × 260D × 470H (mm)



あまりポーズにこだわる事がなかったから、たまにはと思い必死にプラン画を描いて仕事を進めてみた。普段はちらしの裏やいらなくなった紙に、さささっと描いてすぐ仕事をはじめている。デッサンが嫌いなわけではなくて夢中になりすぎて粘土制作の時には精神力や体力がなくなるような気がするからだ。わからない形や事を明確にしようというのが粘土制作の楽しみでもあるからだ 自分を洗い流してみる事も大切なかもしれません

Sleep in the Window

1996

Bronze

300W × 30D × 400H (mm)



枕は家に帰らないと会えない。家に帰るまではいつも窓から外を眺めているだけ。心のなかにはいつも窓と枕が交差しています。窓は生きている証を映し出していて、枕は夢を抱かせてくれるところ。

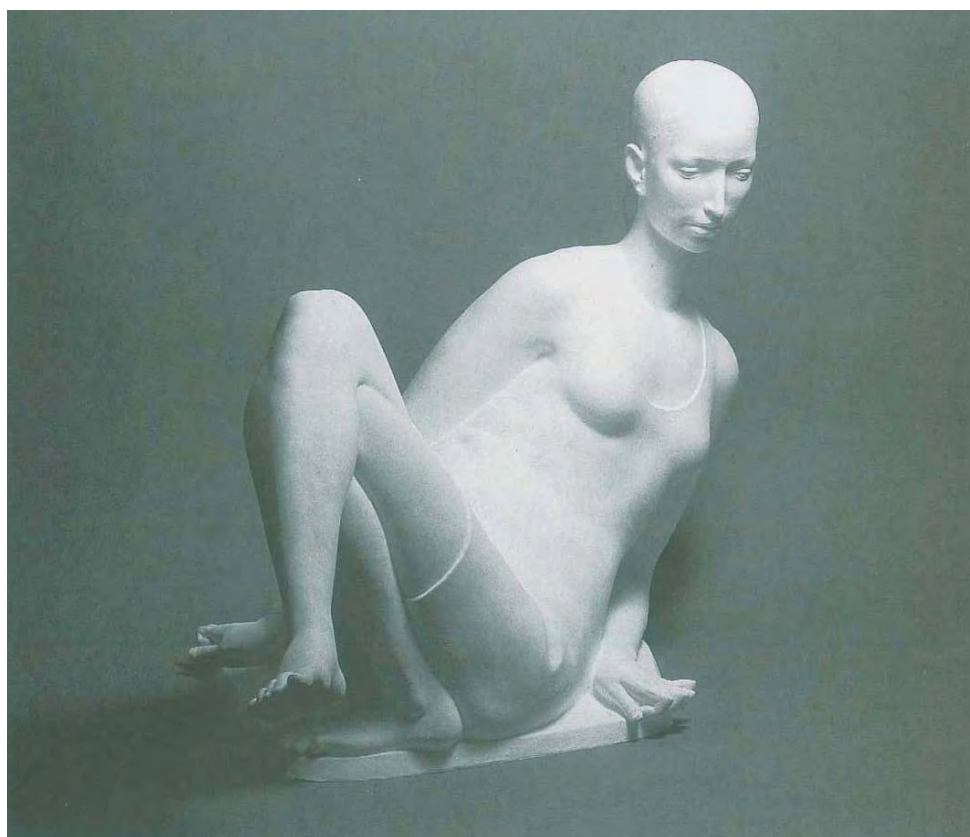
水に書いた文字

1996

plaster

950W×900D×750H (mm)

第81回 二科展



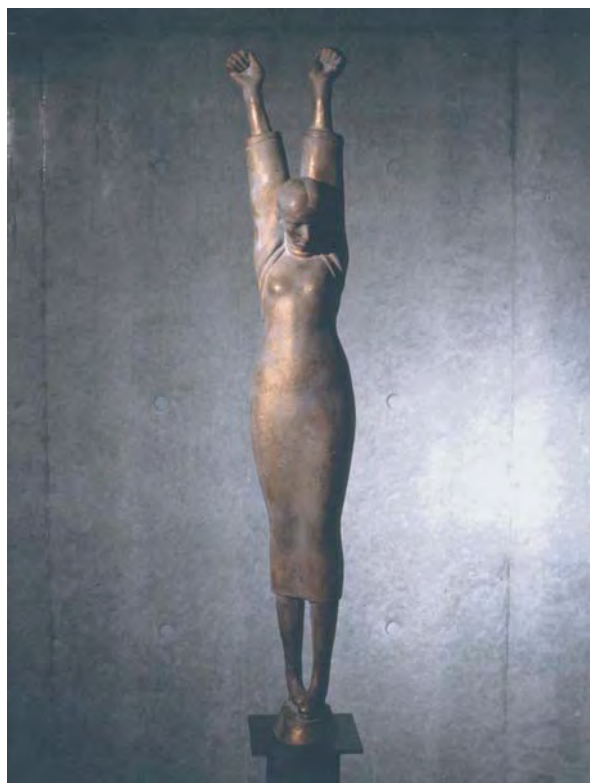
すぐに消えてしまう事 通り過ぎていく事。とどめたい気持ちと裏腹な出来事は案外多い。水にかく文字は指の軌跡に沿って波紋が広がりやがては消え去ってしまうもの。社会の成り立ちそのものがまるで水に書いた文字のような世界なのかもしれない

ソファ

1998

Bronze

150W×140D×880H (mm)



沢山休憩してしまったり寝過ごしたりした後は、この背伸びポーズをする事は少ない。連続した動作の中でその瞬間が長時間に及んだ場合に大きな背伸びをする事が多い。次の行動のための準備運動であり血流をよくする動作である。リラックスした状況も重なるであろう。座り心地のいいソファの横にはこの形がよく似合うはずだ

コノヨデイチバンイイジカン

1997

Bronze

350W×250D×970H (mm)



我々の生活は時間に制約されている事が多い。草花や動物も時とともに成長し生涯を終える。いつも楽しい時間はあり得ないがいつも辛い時間もないはずだ。皆が平等であり喜怒哀楽を感じ生きている。そんな日常がいい時間なのかもしれません。